

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520157

研究課題名(和文)越境する雅楽～伝統音楽の海外における発信・受容と展開

研究課題名(英文)Gagaku crossing boundaries: introduction, reception, and development of Japanese traditional music abroad

研究代表者

寺内 直子 (TERAUCHI, NAOKO)

神戸大学・国際文化学研究科・教授

研究者番号：10314452

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：この研究は、日本の宮廷音楽・雅楽が、海外においていかに発信・受容され、定着、展開しているかを分析する、音楽学的、文化人類学的考察である。本研究は、海外の雅楽を1)日本からの「渡航型」と2)現地居住者による「滞在型」に分け、国際的に活躍する日本の雅楽演奏者やプロデューサーに聞き取りを行うとともに、日系移民の多いハワイ、ロサンゼルス、日系移民が少ないニューヨーク、ケルンでフィールドワークを行い、海外における雅楽実践を、実践者の活動と意識、聴衆の反応、実際の音楽内容、演出等の観点から分析し、その展開のメカニズムと社会的意義を学術的に分析した。

研究成果の概要(英文)：This study examines how Japanese royal court music gagaku is sent out, accepted, settled, and developed overseas from the viewpoints of ethnomusicology and cultural-anthropology. This study classified gagaku practices abroad into two categories, 1) dispatch type (from Japan) and 2) staying type, and conducted fieldworks on leading gagaku musicians, music producers, instructors, and academic researchers in Tokyo, Hawaii, Los Angeles, New York, Cologne, and Paris. The study clarified the mechanism and social meaning of the development of gagaku abroad by analyzing activities and intentions of musicians or instructors, response of audience, music style or presentation outside Japan.

研究分野：民族音楽学

キーワード：芸術諸学 音楽学 文化人類学 伝統芸能 雅楽

1. 研究開始当初の背景

雅楽研究では従来、「古い過去」の歴史を遡り議論する視点が優位であり、近代以降の変化や現代の実態を論じる研究がきわめて少ない。特に海外における雅楽の実態と意義の考察については、これまでほとんどまとまった論考が無かった。応募者自身も1990年代まで、古楽譜の細かな史料批判と楽譜解析・解釈を組み合わせた歴史研究を行って来たが、2000年代に入ってから、近代以降の雅楽の動向と学界における雅楽研究の再評価に取り組み、同時に、今現在活発に行われている現代の新しい雅楽創造の営みを対象とした分析、考察を行った。この過程で明らかになったのは、雅楽は、「宮廷音楽」という脈絡を保ちつつ、一方でそれを越え、演じられる場所・機会・目的や音楽内容それ自体において、一般に考えられているよりはるかに多様化し拡散している実態である。その一部は、すでに海外にもたらされ、さまざまな形で発信・受容されている。応募者自身、1990年代半ばからアメリカの西海岸と東海岸の大学で雅楽の実技指導と講義を行う機会を得、そこでの経験から、雅楽の海外における発信・受容は、都市の規模や人種構成等により内容、形態、意味が異なるということを感じた。本研究はこれを踏まえ、ヨーロッパ、アメリカ西海岸、東海岸、ハワイ等いくつかの都市でフィールドワークを行い、演奏される雅楽の種類、演奏の仕方、担い手、演奏の脈絡などの観点から分析することを思い立った。

2. 研究の目的

この研究は、日本の宮廷音楽・雅楽が、海外においていかに発信・受容され、定着、展開しているかを分析する、音楽学的、文化人類学的考察である。雅楽は古くから天皇制や寺社の儀礼と結びつき、日本伝統音楽の中でも非常に限られた階層に支えられてきた。このため国内限定の種目と考えられがちである。雅楽が宮内庁楽部の海外公演によって正式に

国際交流の場に登場するのは1950年代末だが、実は日系移民によって海外にもたらされ、1960年代以降は大学の民族音楽カリキュラムにも取り入れられて現地に「定着」する現象が見られる。本研究は、従来ほとんど注目されなかった、海外における雅楽実践を、実践者の活動と意識、聴衆の反応、実際の音楽内容、演出等の観点から分析し、その展開のメカニズムと社会的意義を学術的に解明する。

3. 研究の方法

本研究は、発信者としての雅楽の演奏団体、個人、および、雅楽を受容する人々への取材が重要な部分を占める。まず、国内の宮内庁楽部、伶楽舎、日本雅楽会等の団体、および、個人でも活動する雅楽演奏家数名への聞き取り、あるいは活動内容を記した資料収集を行った。一方、海外では日系人の多い地域の例としてハワイ、ロサンゼルス、日系人が少ない地域としてニューヨーク、ケルン、パリで調査を行い、演奏会、実技サークル、大学の授業、演奏者(指導者)、聴衆(参加者)、コーディネーターの活動、目的意識等の調査を行った。

4. 研究成果

海外で実践される雅楽には、1)日本から行く演奏者による公演、ワークショップ、講義(以下、「渡航型」と呼ぶ)、2)現地に滞在する日本人、日系人、その他の人々による実践(以下、「滞在型」とする)の大きく分けて二つの形態がある。

1)の「渡航型」演奏者はさらに、宮内庁楽部や伶楽舎のようなプロの団体のほか、日本雅楽会、雅亮会のような、セミプロ・アマチュア混合の雅楽団体がある。それぞれの団体の性格により、現地でのプロモーションや観客層も微妙に異なる。たとえば、宮内庁の海外公演は、宮内庁と外務省が全面的に協力する大掛かりなもので、しばしば皇族の海外訪問などと連動して行われる。しかし民間団体の公演は、音楽祭への参加や、草の根市民交

流の一環などとして行われることが多く、費用も渡航者負担のことが多い。

「渡航型」については、民間のプロフェッショナルな雅楽団体として最も質が高く、活発な活動を行っている伶楽舎の調査を重点的に行った。伶楽舎のレパートリーはいわゆる明治撰定譜に撰定された古典曲とともに、武満徹、細川俊夫、石井真木、芝祐靖のような現代作曲家による新作雅楽も多数含んでいる。また、創設者の芝祐靖師をはじめ、伶楽舎には宮田まゆみ氏、笹本武志氏、中村仁美氏のように、個人の演奏家として国内外で古典雅楽、現代音楽の演奏を手がける演奏家が多い。特に個人による海外演奏は、現代音楽の一部として雅楽器を使用する音楽の演奏事例が多い。また、伝統音楽の海外公演では、演奏家と聴衆を結ぶ仲介コーディネーターが、重要な役割を果たすことを改めて認識した。たとえば、2010年の伶楽舎のNY公演は、「芝祐靖の世界」と題して芝作品を集中的に上演したが、その企画を立てたのが三浦尚之氏と小野真理氏が運営するミュージック・フロム・ジャパン(MFJ)である。上質の音楽を聞き分け、しかも、新しい作品や音楽家の紹介に情熱を持つ優れたプロデューサーの存在が、音楽文化の交流や発展に不可欠であることが強く感じられた。

2)の「滞在型」の例として、ハワイ、ロサンゼルス、ニューヨーク、ケルンの事例を調査した。このうち、ハワイ、ロサンゼルスは20世紀初頭から移民が多く渡った地域で、雅楽は日系移民の宗教音楽(天理教、浄土真宗、神道)として実践されている他、ハワイ大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)の民族音楽カリキュラムとして1960年代から長らく実践されて来た。今回、ハワイ大学の雅楽指導者・社本正登司氏とUCLAの雅楽グループ創設に尽力したロベルト・ガルフィアス氏へのインタビュー、および演奏会の記録資料などから、雅楽グループ

創設の時代背景、経緯などが明らかになった。ハワイ、LAどちらの雅楽も、当時アメリカで確立しつつあった、実技経験を踏まえた民族音楽研究の方法論を背景にしている。

ハワイでは、天理教の布教使として渡布していた社本師が初め有志の人々と雅楽演奏を行っていたものが大学関係者の目にとまり、1962年に正式に雅楽クラスがハワイ大学に開講した。1968年にはより学生だけでなく地域の人も含んだハワイ雅楽研究会が結成された。ハワイの雅楽は当初より日本雅楽会と関係が深く、相互訪問、合同演奏などで活発に交流している。また、ハワイ雅楽研究会は演劇や新しい舞踊の要素を取り入れた新作も上演している。一方、UCLAの雅楽クラスは1958年、雅楽研究で東京の宮内庁に留学したガルフィアス氏が帰国後UCLAに創設、1962年に別の大学に移る時に、宮内庁から講師(東儀季信師)を招聘して、以後30数年間、東儀氏による指導が続いた。LAでは、UCLAの他、天理教や浄土真宗の洗心寺で東儀師に習った人々が雅楽グループを継続している。なお、大学における雅楽でもコーディネーター的人材が重要で、ハワイではバーバラ・スミス教授、LAではマントル・フッド教授が雅楽クラス創設を強く後押しした。

ケルンとニューヨークは、1990年代以降に雅楽クラスが成立した。どちらも、日系移民がほとんどいない地域で、大学の授業科目として開講されている。ケルン大学の音楽学者のロベルト・ギンター教授は1980年代から雅楽研究を行っていたが、1998年、ハワイ大学に短期滞在した折、社本師と出会い、社本師をケルンに招聘した。2000年に社本師がケルンに滞在して、現地の学生を指導し、雅楽演奏会を成功させたのが雅楽クラス誕生のきっかけである。現在は志水美郎氏が引き継いでいる。一方、ニューヨークのコロムビア大学では、日本の中世文学の研究者バーバラ・ルーシュ教授が中心となり、まず伶楽舎の宮

田まゆみ氏らを招いて雅楽演奏会を企画し、各種財団の援助等を得て楽器を購入するなどの準備を行い、2006年から雅楽クラスが始まった。初年度は寺内が講師として指導を担当したが、現地在住の佐々木教之氏、佐々木ルイズ氏、福井陽一氏に手伝っていただいた。次の年からはこの三名の講師によって継続的にクラスが指導されている。また、コロムビア大学の場合、このような滞在型の雅楽実践とともに、年に一度、宮田まゆみ氏ら日本のプロの演奏家が同大を訪れ、実技ワークショップと演奏会を開くという渡航型を組み合わせている点が独特である。演奏会の作品も、古典だけでなく、現代日本の作曲家やコロムビア大の作曲科を修了した若手作曲家の委嘱作品を演奏する点が注目される。

このように、海外の大学で日本の雅楽は着実に実践されているが、その維持運営には克服すべき問題が多々ある。たとえば、雅楽実践のために大学が行うのは、多くの場合、場所（練習、コンサート）の提供、カリキュラムへの編入（単位化）、予算があれば楽器の購入、である。しかし、楽器の種類と数には限りがあるのが実情で、壊れた楽器の修理、リードや糸など消耗品などは現地調達が難しい。また、演奏会では装束が必要だが、ほとんどの場合、中古、廃棄処分品の無償譲渡または、安価な素材での自己製作、のどちらかである。作る場合は指導者自ら、自己負担で行うことが多い。取材したすべての事例では、現在、天理教の人々が雅楽アンサンブル維持に大きく貢献しているが、これには、天理教では日常的に雅楽を用いること、日本と外国を頻繁に行き来する習慣があり、楽器修理、消耗品の調達が比較容易であること、雅楽の普及や地域の教育への貢献に情熱を持つ人が多いこと等の理由がある。

雅楽実技の継続は、雅楽人口を増やし、雅楽の理解を促進するが、一方で、内容のマンネリに陥らないようにするには工夫が必要で

ある。ハワイの社本氏の場合、特別なイベント等の折に合わせ、自ら雅楽に舞踊を加えたり、劇仕立てにしたものを創作している。またコロムビア大の場合は、毎年プロの演奏家が渡航し、さまざまな現代雅楽が紹介されている。また、日本雅楽会、ハワイ雅楽会、ケルン雅楽会は相互訪問や合同演奏会をすることにより、様々な点でお互いに「刺激」しあっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

寺内 直子 レオポルト・ミュルレルの『日本音楽に関するノート』について、国際文化学研究、査読無、no.40, 2013、25-72

寺内 直子 現代バレエ 輝夜姫 をめぐる小論：日本の楽器を用いる音楽の認識について、国際文化学研究、査読無、no.41, 2013、55-85

寺内 直子 ロベルト・ガルフィアス氏に聞く、日本文化論年報、査読無、no.17、2014、41-75

〔学会発表〕(計6件)

TERAUCHI, Naoko, Strategies for Nurturing Japanese Traditional Instrumental Genres and New Music, A New York Summit 'The Future of the Japanese Music Heritage' hosted by The Institute for Japanese Cultural Initiatives, Columbia University, 2013.3.9, Scandinavia house New York (アメリカ).

TERAUCHI, Naoko, Rethinking 'past' and creating 'present': activities of a gagaku musician Shiba Sukeyasu, the 42nd World Conference of International Council for Traditional Music, 2013.7.13, Shanghai Conservatory of Music (中国)

TERAUCHI, Naoko, *Gigaku* in the 21st century. The 4th symposium of Study Group for East Asian Musics (MEA) International Council for Traditional Music (ICTM), 2014.8.21, 奈良教育大学 (奈良県)

寺内 直子 「復元」研究と実践に関する研究～伎楽を例に、カワイ サウンド技術音楽振興財団平成26年度研究助成受賞者講演会、2015.1.21、アクトシティ浜松（静岡県）

TERAUCHI, Naoko, L'Univers du *gagaku*, 特別講演、2015.2.25、Conservatoire national supérieur musique et danse de Lyon（フランス）

TERAUCHI, Naoko, L'Univers du *gagaku*. 特別講演、2015.2.26-28、パリ日本文化会館（フランス）

〔図書〕(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

寺内 直子（TERAUCHI, Naoko）

神戸大学・大学院国際文化学研究科・教授

研究者番号：10314452

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし